

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第46巻第2号 2010年12月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.46 No.2 December 2010

《論 説》

四字熟語・ことわざの 相違点に関する中日比較研究

楊 立 国・蘇 卓

The comparing research of Chinese and Japanese in idioms and proverbs

Yang Liguo and Su Zhuo

はじめに

日本語の中に「腐っても鯛」ということわざがある。中国語に訳せば、「瘦死的骆驼比马大」となる。ことわざの意味は、両者とも、「本来すぐれた価値を持つものは、落ちぶれてもそれなりの値打ちがあること」のたとえであるが、両者の表現には、かなり異なった形を持っている。日本語の表現では、海の生物である鯛を使っており、中国語では大陸の生物である「骆驼（ラクダ）」や「马（うま）」を用いている。なぜこのような表現の相違が生じるのであろうか。そこで、本論文は中日両国の四字熟語・ことわざにおける相違点を比較したうえで、根源から両者の差異発生の原因を究明しようとするものである。この試みによって、中日両国の文化への理解および誤訳の回避に少しでもお役に立てば幸いである。

一、日本語における四字熟語・ことわざの由来

四字熟語やことわざはいずれも古くから人々に言いならわされたことばであり、教訓・諷刺などの意を寓した短句や秀句である。構成上では二つ以上の語からなり立ち、句全体の意味は個々の語の本来の意味からは離れて、一般に習慣として使われており、ほとんどがきまり文句である。本論文は四字熟語やことわざにはこのような同じ特徴を持っているため、両者を一緒に取り扱うことにする。

どのような国にでも、どのような言語にでも、熟語やことわざがある。それは一つの民族の知恵の結晶であり、言葉の昇華したものでもある。熟語やことわざの研究を通じて、その国の歴史文化や風俗習慣をさらに深く知ることができる。言葉をその民族文化の担い手とすれば、熟語やことわざはまさにその民族の地理環境、社会歴史、思考様式、美意識などを具現したものである。

日本語の中には、古くから中国語に由来した四字熟語・ことわざが大量に存在している。形も、意味も中国語と同じものも多い。例えば、「四面楚歌」、「温故知新」などがある。これは、中日両国は同じ漢字文化圏に属しており、日本は中国の漢字を導入する際、そのまま継承したものだといってもよい。もちろん、長い間、ある四字熟語・ことわざの本来の意味が失われたり、別の意味に変わったりしたものも少なくない。例えば、「落花流水」という四字熟語は、中国語では「さんざんに打ちのめされる形容」として使われているが、日本語では「男に女を思う情があれば、女にもまた男を慕う情の生ずること、相思相愛」という意味になる。また、「朝三暮四」は、中国語では「移り気であることのたとえ、また、考えや方針が定まらず、当てにならないこと」という意味であるが、日本語では「目の違いにばかりこだわって、同じ結果となるのに気がつかないこと、また、口先でうまく人をだますこと」として使われている。

また、日本語の中の四字熟語・ことわざは、すべて中国語に由来したのではなく、日本国内から生まれたものも多い。これらの四字熟語・ことわ

ごこそ、日本の社会文化と日本人の心をよく表していると考えられる。日本国内から生まれた四字熟語・ことわざは、以下のものによって構成されている。第一に、民間に伝わってきたものである。例えば、「鯖を読む（打馬虎眼）」、「魚心あれば水心あり（人情一把鋸）」、「瓜のつるに茄子はならぬ（烏鴉窝里飞不出金凤凰）」。第二に、歴史物語から生じたものである。例えば、「鎧袖一触（鸡蛋碰石头）」、「敵は本能寺にあり（醉翁之意不在酒）」、「小田原評定（议而不决）」、「清水の舞台から後ろとび（孤注一擲）」。第三に、詩から来たものである。例えば、「酒屋へ三里豆腐屋へ二里（穷乡僻壤）」、「孝行のしたい時分に親はなし（子欲养而亲不待）」。第四に、童話から作られたものもある。例えば、「開けて悔しき玉手箱（后悔莫及）」、「恐れ入り谷の鬼子母神（不胜惶恐）」。

以上を由来から見ると、日本国内で生まれた四字熟語・ことわざの中で民間からのものが最も多く、日本の社会生活をよく反映しているものである。日本語の四字熟語・ことわざと比べて、中国語の中の四字熟語・ことわざは歴史物語からのものが多くて、生活と密切したものは少ないと言わざるをえない。また、中日両国における地理環境、歴史文化、思考様式などの相違は四字熟語・ことわざにもよく見られる。

二、異なる地理環境から生じた四字熟語・ことわざの相違点

各国の特有の自然環境はその国の言葉によって表れている。中国語の四字熟語・ことわざからは中国の名山大川の勢いが感じられる。例えば、「涇渭分明（涇河の水は清く、渭河の水は濁っていて、涇河が渭河に流れ込んだときに清濁の境目がはっきり分かれる。両者の間にはっきりした一線が画されているたとえ）」、「巴山蜀水（『巴』、『蜀』は四川省あたりを指していることから、四川省の山々と川）」。「泰山北斗（山の泰山も北斗星もともに仰ぎ見るものであることからその道で世に仰ぎ尊ばれる人のたとえ）」。「不到黄河心不死（目的を達するまでは決してあきらめない）」。「长江后浪推前浪、世上新人换旧人（長江は後の波が前の波を押しすすめ、世

の中は新しい世代が古い世代にとってかわる)」。山河の名前のほか、中国の四字熟語においては、山河の風景を描くのも多い。例えば、「万里河山(万里の山河)」、「汪洋大海(洋洋たる大海)」、「山青水秀(山紫水明、風景が美しい形容)」、「碧波万顷(見渡す限りの青海原)」、「崇山峻岭(高く険しい山と峰)」などなどがある。

中国には果てしなく広い土地と多様な地形があるため、動物と植物の種類も多い。虎、狐、ヤマイヌなどの動物と梅、蘭、竹、菊などの植物は四字熟語・ことわざにはその姿がよく見られる。「狐假虎威(虎の威を借る狐。権力者の威勢を笠に着る者のたとえ)」、「狼狈为奸(ぐるになって悪事を働く。伝説によれば、「狈」は前足のきわめて短い動物で、オオカミの背に寄りかからなければ歩けないことから、いつもオオカミと行動をともにするという)」、「犬马之劳(犬馬の労)。旧時、臣下が君主に対して自らを犬馬にたとえ、謙遜と忠誠を表したもので、人に忠義だてをすること)」、「虎背熊腰(虎の背に熊の腰、体格のたくましい形容)」、「桂馥兰香(桂と蘭はいい香を放つことから、香りのいい形容)」、「年在桑榆(夕方になって、夕日が、桑や榆の木にさしかかる景色から、人の晩年のたとえ)」、「春兰秋菊(春のランに秋の菊。それぞれの季節には独自の美しさがある。ものにはそれぞれ秀でたものがあるたとえ)」、「松柏之茂(松柏の枝葉は年中緑であることから、永久に栄えるたとえ)」などなどがある。

日本の四字熟語・ことわざには、自然を表すのも多い。しかし、中国語とは違って、日本は四季折々の変化に富んでおり、古くから日本人が自然によく親しんでいて、自然に対して強い関心をもっている。そのために、日本語の四字熟語・ことわざには雨、風、月及び季節と関係のある言葉が多い。例えば、「旱天の慈雨」、「月に群雲花に風」、「ものいえば唇寒し秋の風」、「冬来たりなば春遠からじ」、「夏も小袖」などなど、このような表現である。

日本にも、植物の種類が多く、植物に関する四字熟語・ことわざは多く見られる。しかし、この点も中国語と異なって、日本在来の植物だけが四

字熟語・ことわざに出ている。例えば、「花は桜木、人は武士」、「六日の菖蒲十日の菊」、「梅檀は双葉より芳し」、「矯めるなら若木のうち」、「柳に風」などなどはその例である。

日本語の中で虫や鳥に関する四字熟語・ことわざもよく現れてきた。例えば、「小の虫を殺して大の虫を助ける」、「蓼食う虫も好き好き」、「鳴く虫は捕らる」、「苦虫を噛み潰したよう」、「烏鷺の争い」、「後の雁が先になる」、「鳩に三枝の礼あり鳥に反哺の孝あり」などがある。

このように、中日両国の四字熟語・ことわざの中に自然環境とかかわるものは多く存在している。ところが、この点においては、中日両国はかなりの相違がある。中国の人々は国土の広い内陸に生活しており、大陸的地理環境と深く関連しているものは四字熟語・ことわざに多く使われている。これに対して、日本は島国であり、島国にふさわしい四字熟語・ことわざが大量に生れた。例えば、同じたくさんのお金を使うことを表現する場合、中国語では「挥金如土（お金を土のように使う）」、日本語では「お金を湯水のように使う」のように、両者は異なるもので表現されている。また、「はじめに」で示した同じ意味を表す「腐っても鯛」という日本語の表現と、「瘦死的骆驼比马大」という中国語の表現は、共に各自の自然環境から生じたふさわしい表現だと考えてよいであろう。

三、異なる文化から生じた四字熟語・ことわざの相違点

中国と日本とも長い歴史を持つ国である。こうした長い歴史で育てられた文化もそれぞれ特色があるものである。もちろん、文化の違いによって四字熟語・ことわざの表現も違ってくる。ここでは、まず、二つの例をあげて、この問題を説明しようと思う。

一つは牛に関連する表現である。中国語の中に、牛を使う言葉には「牛脾气（頑固な性格）」のような悪いイメージを持つものがあるが、その数が非常に少ない。牛は中国人に与えるのは、「忠誠」、「まじめ」、「よく働く」というイメージである。言葉に反映して、「老黄牛」、「孺子牛」など、

他人のために一生懸命働くという意味である。また、漢詩の中に、「老牛亦知夕陽晚、不待揮鞭自奮蹄（牛もすでに遅くなっていることを知り、叩かなくても必死に働く）」のような牛を賛美するものが多数存在している。

ところが、日本語の中に牛に関することわざは20語ぐらいしかなく、すべてマイナスイメージの表現である。例えば、「牛に喰らわれる」、「牛の歩み」、「牛を馬に乗り換える」、「牛のよだれ」などである。

このような相違点の発生はおそらく農耕文化との関わりが深いのだと考えられる。中国では、漢の時代から牛耕が始まり、それから二千年以上人々は牛と一緒に生活し、一緒に働いてきた。牛は日常生活の不可欠の一部であり、人間の仲間である。中国古代の七夕伝説には人間と牛との関係を語っている。しかし、日本は島国であり、牛耕は狭い範囲に限られ、日本人は古くから牛に親しまない。言葉に反映すると、上記のようなイメージのあまりよくない言葉が生じるのはごく自然なことだと思われる。

文化の相違によって言葉の表現も異なってくるもう一つの例は、花に関連するものがある。中国語の中でも、日本語の中でも花に関わる四字熟語・ことわざは多い。しかし、両国の美意識、生活習慣および価値観などを代表とする文化の違いによって、花と関連する四字熟語・ことわざの表現も違ってくる。その典型的なものは梅の花と桜の花に対する相違である。

日本にも、中国にも梅の花と桜の花がある。しかし、両国の国民は梅の花と桜の花に対する見方がかなり異なる。中国人から見て、梅の花は寒さなどに屈しない性格があり、形としては力強くぬきんでており、香りとしては連綿としてすがすがしく感じられる。したがって、梅の花は古くから文学家や画家によって愛され、上品や非凡の象徴として謳われてきたのである。中国語の中に、「梅妻鶴子（梅を妻として、鶴を子供とする。隠逸生活の快適のたとえ）」、「梅花三弄（潔い人格のたとえ）」があって、中国人の心の中に梅の花はやはりほかの花に比べられない地位にあると言えよう。

桜の花は日本の国花であり、日本の国民精神のシンボルでもある。桜の

開花は、生命力旺盛の極みであり、「満開」という言葉はそこから生み出したようである。小さな、白い桜の花びらが漂いながら徐々に落ちることを見て、人々は死を思い出させる。したがって、桜の花は人生の美しさと短さを完全に表現し出している。桜の花のこれらの特徴は日本人が一生懸命働いて何も留さずに去るという心にぴったりとあてはまる。そのため、日本人は桜の花で世の移り変わりの激しいことや人生の不確定性を表している。「世の中は三日見ぬ間の桜かな」とは、このように生まれたのではないか。また、「花は桜木、人は武士」というように、日本国民の心の中に、桜はやはり最高の花となっている。

また、中国語の四字熟語・ことわざは中国の独自の文化を反映するものが多い。中には古代音楽や楽器が多く見られる。例えば、笙磬同音（笙と磬の音は同じである）、琴瑟和谐（琴瑟相和す。夫婦の仲がよいこと）などがある。縁起のいい獣類や鳥類が古代中国の人々に愛され、四字熟語・ことわざにも用いている。例えば、「鶴立鸡群（鶏群の一鶴）」、「鶴发童顔（白髪童顔、年老いてもかくしゃくとしていること）」の中の鶴は縁起のいいものである。また、実際存在しないが、古代の人々が虚構した縁起物もある。「攀龙附凤（権勢のある人に取り入って出世しようとする）」の中で、「龙（竜）」と「凤（鳳凰）」とも実際存在していない縁起物である。これらの縁起物には人々の期待が託されているからである。

中国では歌、詩の趣を表す四字熟語・ことわざもある。中国語の四字熟語には詩から転じてきた言葉が多くあるため、いきいきとした詩のような情趣を描かれているのがよくある。「烟嵐云岫」は陸游の「万卷书楼」の詩、「烟嵐云岫、洲渚林薄、更相映发、朝莫万态」に由来して、雲霧が連山の間に瀰漫している様子を形容する言葉である。「人去楼空（人が去っていき、楼が空の状態）」は崔颢の「黄鹤楼」という詩から生まれた言葉で、「昔人已乘黄鹤去、此地空余黄鹤楼。（昔の人は黄色い鶴に乗って去り、この地にはむなしく黄鹤楼が残るばかりである。）」、旧居を目の前にして、故人を限りなく偲ぶせつなさや落胆した気持ちを表している。「凄风苦雨」は

范成大の「惜纷飞」から来ており、「重別西楼肠断否？多少凄风苦雨」というもので、ひどく悪い天気の状態、あるいは苦境に置かれているたとえである。日本のことわざの中でも、詩から生じたものもある。例えば、「酒屋へ三里豆腐屋へ二里」などがある。しかし、これらは日本の独自の文化を反映している。

中国は古くからの農業大国であり、四字熟語・ことわざには直接人々の生活における農業の重要性を強調するものがある。例えば、「农是百行本（農業はほかの業の元である）」ということわざがある。農作業の時期をまとめた言葉もある。「春不种、秋不收（春は種を蒔かないと、秋は収穫できない）」。それから農業の耕作経験を語る言葉もある。「五谷丰登（五穀豊穰（ほうじょう）」、「十分收成、七分管理（作柄は十分、管理は七分）」。

もちろん、日本も農耕を重視する民族である。「蒔かぬ種は生えぬ」、「詩を作るより田を作れ」という言葉がある。しかし、日本が稲作の国であり、「我田引水」は水の重要性を強調するのは多い。また、日本において、もっとも特色のあるのは漁業である。四字熟語・ことわざの中では「魚」を含める言葉がよく見られる。「雑魚の魚と交じり」、「鯛の頭も信心から」、「鰻登り」、「蝦で鯛を釣る」、「鯖を読む」などがある。魚の種類が豊富である一方、漁場の種類も細かく分類されている。「浜の真砂」、「負うた子に教えられて浅瀬をわたる」などがそれである。

中国語と比べて、日本語の中の四字熟語・ことわざは衣食住などの日常生活に関わるものが多い。「夏も小袖」、「梅干と友達は古いほどよい」、「重箱で味噌をする」、「棚から牡丹餅」、「こんにゃくで石垣を築く」、「紺屋の明後日、畳の上の水練」、「旅は道づれ世は情け」などなどがある。

四、宗教に関連する四字熟語・ことわざの相違点

中国本土の宗教は道教であり、そのあと仏教が伝来した。また、中国の社会倫理においては、儒教が二千年以上を行き渡ってその影響力を発揮してきている。四字熟語・ことわざにおいては、宗教と関わるものが少なく

ない。「菩薩心腸（菩薩のころ、やさしいころのたとえ）」、「救人一命
 勝造七級浮屠（一命を救助すれば七重塔を建てると勝る）」などは仏教か
 ら来た言葉であり、「有钱能使鬼推磨（地獄の沙汰も金次第）」、「一人得道、
 鸡犬升天（一人が権勢を得ると、その一族郎党までも出世する）」などは
 道教から来た言葉である。仏教と道教が混ざった言葉もある。「八仙过海、
 各显神通（おのおの独自のやり方がある。各自がそれぞれ腕を振るって競
 う。西王母の誕生祝いの帰りに、酒に酔った八仙が海の中の仙女をからかつ
 たところ、仙女は怒って海を荒らし、八仙に戦いを挑んだ。八仙は各自の
 持ち物で戦い、やっと海を渡ることができたという伝説から生じた）」は
 その例である。支配的立場にある儒教からも「夫唱妇随（夫唱婦随。妻が
 夫に従順であること。夫婦が仲むつまじい形容）」のような四字熟語があり、
 人々の振る舞いと行動を規範するためである。

日本は多宗教の国である。国内の神道のほか、仏教、キリスト教、ヒン
 ドー教などの教義を多く吸収し、多面性を併せ持つと言える。もちろん、
 仏教に関することわざによく見られる。「釈迦に説法」、「坊主憎けりゃ袈
 裟まで憎い」、「三人寄れば文殊の知恵」、「木仏金仏石仏」、「もとの木阿弥」
 などはこの例である。しかし、宗教に関わる四字熟語・ことわざのなかに、
 もっとも際立っているのが神道である。日本の神道は多神教であり、大自
 然にあるさまさまの神を崇拝することから自らの祖先まで、多種多様であ
 る。「鬼が出るか蛇が出るか」、「門松は冥途の旅の一里塚」、「あいさつは
 時の氏神」、「恐れ入り谷の鬼子母神」、「苦しい時の神頼み」、「触らぬ神に
 祟りなし」などのことわざは国内の神道から生まれたものである。

五、思考様式による四字熟語・ことわざの相違点

語順は言葉の構成ルールを表している。中国語の四字熟語・ことわざの
 中に、方位詞は常にある一定の順序で並べ、「上」は「下」の前、「左」は
 「右」の前、「前」は「後」の前、「内」は「外」の前に並べられる。例えば、
 「七上八下（心が乱れることや心を決めかねることのたとえ）」、「左右为难

(板挟みになることや進退きわまること)、「瞻前顾后 (後先をよく考えて、事に当たって慎重で、優柔不断)」、「内外有別 (うちとそとは区別ある)」、などなど。その中で、「左」と「右」によって構成された四字熟語・ことわざが特に多い。例えば、「左右逢源 (万事順調にいく)」、「左顾右盼 (左を見たり右を見たりする)」、「左思右想 (よく考えること)」、「左耳听右耳冒 (人のいう事を聞かないたとえ)」などなどはすべて左が前で右が後ろで、「右手画円、左手画方 (右の手で円を描き、左の手で四角を描く)」は唯一の例外である。

中国語の「左」前「右」後ろとの安定した語順に対し、日本語の四字熟語・ことわざには、「左」前「右」後ろの語順もあれば、「右」前「左」後ろの語順もある、しかも、「右」前「左」後ろのほうが多い。例えば、「左右を顧みて他を言う」、「左は勝手右は得手」は「左」が前であるが、「右と言え左」、「右から左へ」、「右の耳から左の耳」、「右の手で放して左の手で握る」、「右とも左とも」、「右も左も知らない」、これらはすべて「右」が前で「左」が後ろとなっている。

また、中国人は「龙凤」と言うが、「凤龙」とは言わない。なぜならば、竜の体には多くの動物の長所が集まっていると思われているからである。竜は天に昇ったり、地に入ったり、雲を起こして雨を降らせることもできるため、古代では最高統治者を代表していた。例えば、「竜種」は「皇帝の息子」を指す。現在、民間では、「竜」には王の権威の意味合いがなくなったが、吉祥の象徴として、依然として庶民に尊崇されている。お正月・祭日になると、庶民は竜燈舞いをしたり竜船を漕いだりしてお祝いをしている。「鳳」は一種の神鳥といわれ、すべての鳥の長である。歴史文化の中で、例えば始皇帝時代では、「鳳」は一度は「竜」と対抗したことがあるが、漢代の後、「竜」が主導的なもので、「鳳」が副次的なものという局面は揺るがされることがなかった。それに、後世になって、「鳳」は次第に皇后の代名詞になった。皇后は六宮の長であるが、男尊女卑の封建時代では、皇后は永遠に皇帝を凌ぐことができない。従って、「竜」と「鳳」を

使う四字熟語・ことわざは、すべて「竜」が前にあって、「鳳」が後ろにあるという語順になっている。例えば、「龙飞凤舞（竜が飛び鳳が舞う）」、「攀龙附凤（権勢のある人に取り入って出世しようとする）」などがある。

日本と中国とは近隣国ではあるが、心理的な認知の面においても大いに異なる。例えば、日本人はきめ細かでなめらかな皮膚が「お餅」（もち米でできて、外観は滑らかである）に似ていると考え、日本語には「餅肌」という言葉があるが、この表現は、中国人からみれば滑稽に感じるかもしれない。中国人は「氷肌雪膚」と表現する。似たような心理的な認知差異はみんな四字熟語・ことわざに反映されている。

日本人は体で意図を表すのが得意である。すなわち、人体の四肢、五官、器官のすべてを生き生きさせる。「肌に粟を生ず」のような、文字から意味が理解できることわざもあるが、日本独特の思考様式で、中国人の考え方にそぐわなく、中国人に理解しにくいものもある。例えば、「苦味のある顔」、「目から鼻へぬける」、「喉から手が出る」、「揚げ足を取る」、「腹の虫がおさまらない」、など日本のことわざは体の一部をもって具体性を表す傾向がある。

また、数字をうまく使うのは日本語の四字熟語・ことわざの一つの特徴である。「多年媳妇熬成婆」を日本語に訳せば、「石の上にも三年」となる。中国語で数字を使っていないにもかかわらず、日本語では使っている。このような例はまた多く存在している。例えば、「能说又能干（口も八丁手も八丁）」、「各有各癖（無くて七癖あって四十八癖）」、「夏炉冬扇（六日の菖蒲十日の菊）」、「寸土寸金（土一升到金一升）」などはこの類に属している。

おわりに

同じ漢字文化圏に属する中日両国は、長い歴史の流れにおいて互いに学びあい、交流しあう結果、多くの面では、共通的な東洋思想を持つようになってきている。言葉に反映して、両国の四字熟語・ことわざ表現はともに具象的なものや心で悟ることを重んじており、構成上の厳密さを軽視してい

る。違う土壌から生まれた四字熟語・ことわざでも、構成、語意、用途においてまったく同じあるいは似たような意味を持つ場合は少なくない。これは偶然にあう現象ではなく、同じ文化圏から生じた同じ発想だと考えられる。

他方、地理環境、歴史文化、宗教、思考様式などの相違によって、両国の四字熟語・ことわざはそれぞれ独自な特徴を持っている。中国語の中の四字熟語・ことわざは名山大河、土地の広大さと物産の豊富さを十分に表しており、四千年の歴史の中で形成された文化の特質と儒教・仏教・道教からの影響を完全に反映している。これに比べて、日本語の中の四字熟語・ことわざは大きさや広さという勢いがやや足りないが、活気にみちたものや生活に密接しているものがよく見られる。

参考文献

- [1] 杜海怀. 「中日谚语在翻译时的差异」. 『日语知识』、2003年第5期
- [2] 冯峰. 「中日同源成语的比较研究」. 『清华大学学报（哲学社会科学版）』、2002年增刊
- [3] 冯峰. 「中日同源成语意义的异同」. 『日语学习与研究』、2001年第1期
- [4] 冯明舒. 「中日谚语比较初探」. 『日语学习与研究』、2005年增刊
- [5] 马心丹、李梨. 「日语谚语的探析」. 『日语学习与研究』、2002年第3期
- [6] 孙振萍. 「汉日成语文化因素邹议」. 『天津师大学报』、1998年第3期
- [7] 王菲、刘旭宝. 「日汉成语对比研究」. 『西南交通大学学报（社会科学版）』、2002年第3卷第4期
- [8] 杨薇. 「汉语成语与民族文化」. 『编辑语文知识』、2004年第1期
- [9] 郑亨奎. 「汉日成语对比研究」. 『天津外国语学院学报』、2006年第13卷第1期
- [10] 郑丽芸. 「日汉对应成语对比研究」. 『语言教学与研究』、2004年第3期
- [11] 宫地裕. 『慣用句の意味と用法』. 明治書院、1982年